

「君の欲しいものは何ですか？」

～あらたな・あなたに・あうために～

詩編 61 章 2～3 節

聖学院大学 人文学部長 清水 均

今年には聖学院大学創立30周年の年にあたります。私は「創立30周年記念事業実行委員会」の委員長をつとめていますが、実行委員会では、全教職員によって制作された「あらたな・あなたに・あうために」というキャッチコピーを記念事業の指針としています。ここには「30周年」を、単に過去を振り返る、懐かしむものとするのではなく、むしろ「明日」へ、「未来」へ向かうきっかけとしたいという願いが込められています。そして、この場合の「あなた」は、学生のみなさんは勿論のこと、でもそれだけではなく、教職員、ひいては聖学院大学全体を意味していて、だからこのキャッチコピーは、「聖学院大学が新たな未来に向かうための30周年」という意味合いを持つこととなります。

では、本日の奨励題のメインテーマである「君の欲しいものは何ですか？」は、サブタイトルとして示したこの「あらたな・あなたに・あうために」というキャッチコピーとどのように関連するのでしょうか？また、それは本日の聖書の箇所とどのように関係するのでしょうか？

まずは「君の欲しいものは何ですか？」について触れたいと思います。「君」は端的に言って学生のみなさんです。「何ですか？」と聞いているのは私。つまり、私はいつも君たちが何を欲して、何をしながらしているのかを知りたいと思っている、ということです。別の言い方をすれば、「君たちは今、何に困っていて、何を期待して、何を幸せとっていて、何に不満や怒りを抱えて生きているのか」という、君たちの「思い」というものを、下手をすれば君たちが暑苦しいと感じるほどに知りたいということなのです。

本当に、これはちょっと「暑苦しい」ですね。「暑苦しい」かもしれませんが、そこは一応許していただきたい。何故なら、やっぱり身近な人の不幸せを見るのは嫌だからです。

けれども、そうした君たちの「思い」というものを正確に知るといことはとても難しく、もしかしたら不可能なのかもしれないとも思います。たとえば私が君たちに「大丈夫か？」と問えば、「笑って大丈夫と答える」ことも、「大丈夫と言いながら顔が曇っていたりする」こともありますし、「鬱陶しいとかウザいとか思われているらしく、こちらの言葉がスルーされたりする」こともあるでしょう。要するに、私が君たちの「思い」を知るといことはとても難しいと思うわけです。そして何より、君たち自身にしても、自分の思いというものがわかっていなかったりするわけです。

そこで、そもそも「人の思いを知る」「自分の思いを知る」といのはどのようなことなのか、について考えてみたいのですが、きっかけとして一つの例を挙げてみます。

私は韓国映画を観ることが多く、チョンジヒョンという女優さんをこよなく愛しているのですが、ここでは別の女優さんが出演している「インサイド・ビューティー」という作品の話をしてみたい。

この作品の主人公は毎朝起きると違う顔になっている男です。正確に言えば、この主人公は、元々は韓国人の男として生まれたのに、12歳のある朝突然、顔だけでなく年齢も性別も国籍も以前とは違う人間になってしまい、その後も眠るたびにどのような人間になってしまうかわからないという設定になっています。ただし、内面性というか人間性だけは変わらない。つまり、「姿形が違ってしまふから、周囲の人からみたら同一人物とはわからない」けれども「本人の意識は変わらない」というわけです。

そんな主人公がある女性を好きになります。最初のデートの時にその女性も彼に好意を持ってくれて次の日も会う約束をしたのですが、眠ってしまうと別人になってしまうため、彼は自分の姿が変わらないように3日徹夜をしました。しかし、ついに寝てしまって、その結果中年のうらぶれた男になってしまいます。これ以降2人は会わなくなりますが、やがて彼女への思いを捨てられない彼は自分の事情を告白します。この時彼は女性の姿になっているのですが、その後も色々な姿に変貌し紆余曲折はあるけれども、結局はその女性はその事実を受け止めて男を愛するようになります。彼女は「見た目ではなく中身を愛した」ということになるのでしょうか。

しかしある時点、即ち、男が結婚を申し込んだ時点からその女性は精神に破綻をきたしてしまいます。その理由は簡単には説明出来ませんが、根底には、愛する人に対して「毎日毎日違う人間を恋人として受け入れる努力をしなければ気持ちが追い付いていかない辛さ」というものがあります。考えてみればわかりますね。いくらその人の性格や内面が好きだと言っても、毎度毎度姿形が変わる人間をそう簡単に愛することは難しい。やがて女性はそうした辛さ、苦しみから逃れるために薬に頼るようになり、二人は別れることになります。

その後この二人はどうなったか。想像はつくと思いますが、その後再び結ばれることになります。別れをもちかけた女性の方が男性のもとを訪れることになるのですが、その再会の場面で彼女が何を感じたのかが次のように語られます。

昨日の私と今日の私は同じだろうか？毎日同じ姿をして、違う心で揺れていた。毎日違う人だったのは、あなたではなく私だったのかもしれない。勿論この映画がファンタジーで、その意味ではデフォルメされた形で表現されているのですが、この作品が指し示しているのは、主人公の「姿形は変わるけれども内面は変わらない状態」と、女性の「姿形は変わらないけれども気持ちは揺れて日々変わっている状態」という設定がどのような意味を持つか、ということになります。

主人公の「姿形は変わるけれども内面は変わらない状態」ということについて言えば、私たちはよく、女性が髪を切ったりすると「失恋でもしたの？」なんて聞いてしまいますが、この主人公のありようは、えてして外見でその人を判断してしまいがちな私たちに対して、人の「思い」を知ることがどれほど困難なことであるのかということに思いを至らせます。一方で「昨日の私と今日の私は同じだろうか？毎日同じ姿をして、違う心で揺れていた。毎日違う人だったのはあなたではなく私だったのかもしれない」という思いは、やはり「内面の見え難さ」を示唆していますが、この場合は「自分自身の内面の変化」への知り難さを描いています。

私は先ほど、「私は君たちの「思い」を知りたいが、それはとても困難で、しかも君たち自身も自分の「思い」を知るのは難しい」と述べましたが、映画の女性の言葉には、そのような「思い」を知ることの困難さを示唆してくれているということができると同時に、私たちが生きる中で築いていく人間関係に

おける課題を示していると思います。

ここで唐突に申し訳ありませんが、私事について触れます。8月31日に母が他界し、翌日の9月1日に娘が結婚披露宴をしました。この慶弔二日連続の出来事は思いのほか私にとってはきついものがありました。母の死にあたっては自分は「子供の心情」になり、娘の結婚に際しては「親の心情」になったわけで、その精神の振れ幅には正直ついていけない面がありました。しかも「悲しみと喜びと」という、いわゆる「悲喜こもごも」の大幅の振れ幅も伴っていたために自分の心が揺れすぎてしまった面がありました。ただ、そんな中でも、この「母」と「娘」という近親の存在に対して、これまであまり感じてこなかった私自身の感情に触れ得たことは、多少なりとも意味のあることだったと思います。

母が亡くなることに対しては、心の準備ができていました。そして、その準備をする中でふと思ったのは、「母は自身の死を目の前にして何を思うのか、人生の最後に何を望んでいるのだろうか？」ということでした。実は、生前の母を見舞った最後の時に、母が病床でつけていた日記を発見しました。ここでは女学校時代の「マリコ先生」という先生への慕情、会いたいという強い気持ちと、もつとちゃんと勉強すれば良かったという自責の念と先生へのお詫びの気持ちが記されていました。「なんだよ、最後に思うのは子供のことじゃないのかよ」と一瞬思わないではいられなかったのですが、その一方で「会いたい」という母の最後の思いの強さというものにたじろがずにはいられませんでした。

一方の娘ですが、披露宴でのお約束である「両親への手紙」を彼女が読んだ時のことです。娘は最初から号泣していました。まあ、つられて私も涙するわけですが、彼女が父である私との思い出を語る中に「小さい頃2人でいったラーメン屋」のことがありました。これは私にとってはとても意外で、「ラーメン屋かよ」と思いつつ、「ああ、彼女の思いの中では今、父親とのかつての時間がそんなふうに思い出として強くごめいしているのか」という感慨を覚えたわけです。

いずれにしても言えるのは、母の「思い」にしても娘の「思い」にしても、結局は私の想像を超えていて捉えどころのないものだということです。家族という身近な人間の「思い」にも関わらず、「子供」でもあり「親」でもある私には正確には分かり得ないのだとつくづく思い知らされました。そしてまた、母にしても娘にしても、それぞれ「死」と「結婚」という人生の境目に立ち至った時であるからこそ、自分自身の「思い」というものを知り得たのだろう、言葉を紡ぐ行為を通して初めて、あるいは改めて自分の「思い」というものに出会ったのだろうということです。

最初の話に戻りますが、私がいくら学生に対して「君の欲しいものは何ですか？」と問いかけたところでこれをわかることは到底困難なことであると言わざるを得ません。だとすれば、君たちの「思い」に対しては、私は一生懸命考えるしかないと思うし、まずは学生のみなさんそれぞれの自身の「思い」との格闘に任せたいと思います。ただ、君たちにはその「思い」との格闘が自身の幸せを希求するモガキであってほしい。そして、その幸せは、みなさん自身の「思い」をすらも越えて素晴らしいものとなってほしい。これだけは切に願っています。

さて、ようやくここで本日の聖書の箇所にとどり着きました。

詩編 61 章 2-3 節

◆新共同訳

神よ、わたしの叫びを聞き わたしの祈りに耳を傾けてください。心が挫けるとき 地の果てからあなたを呼びます。高くそびえる岩山の上に わたしを導いてください。

◆口語訳

神よ、わたしの叫びを聞いてください。わたしの祈りに耳を傾けてください。わが心のくずれおれるとき、わたしは地のはてからあなたに呼ばわれます。わたしを導いて わたしの及びがたいほどの高い岩にのぼらせてください。

私は「口語訳」に慣れ親しんできましたので、こちらも引用しましたが、そこにある「わたしの及びがたいほどの高い岩にのぼらせてください」という祈り、この祈りは私のみなさんに期待する思いを越えて、更には皆さん自身の思いをも越えた地点に君たちの幸せをもたらしてくれるのだと思うのです。

ところで、本日のテーマ「君の欲しいものは何ですか」というフレーズは、実は私がもう長年にわたって好きであるあるアーティストの『流星』という曲で繰り返し歌われるフレーズです。この曲の中には、「たしかな事など何もなく ただひたすらに君が好き」というフレーズがありますが、この「君が好き」というのは「欲しいもの」の一つの象徴だと思われまます。ここにはみなさんそれぞれの「〇〇が好き」、あるいは「〇〇が欲しい」という強い「思い」や願望の言葉を入れてみると良いと思います。ともかくも「たしかな事など何もない」と思ってしまうことは多いけれども、だけど「ただひたすらに」という強く切実な「思い」というものを抱いて大学生を送って、やがては「幸せ」になってください。

そのような学生の一人一人の「幸せを希求する思いの強さ」が聖学院大学の色を作っていくし、特に今在籍しているみなさんと教職員一人一人の「思い」の強さというものが、これからの聖学院大学の未来を形成し、希望ある大学となっていくのだと考えます。

2018年9月26日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「創立30周年を覚えて」